明治から大正時代の校舎形式を引き継いだ東北日本海側の特徴ある木造校舎

国登録有形文化財　旧 鮎 川 小 学 校

（きゅうあゆかわしょうがっこう）

１．名　称：旧鮎川小学校　屋内運動場
　　旧鮎川小学校　北校舎棟
　　旧鮎川小学校　中央校舎棟
　　旧鮎川小学校　南校舎棟
　　４件（１か所）
２．所在地：由利本荘市町村字鳴瀬台６５番地１
３．所有者：由利本荘市
４．答申日：平成２３年１２月　９日
５．登録日：平成２４年　２月２３日

○沿　革

旧鮎川小学校は、由利本荘市由利地区（旧由利町）に所在し、昭和２９年（1954）、旧鮎川中学校として新設された木造校舎です。昭和４５年（1970）に同中学校が由利中学校に統合された後、鮎川小学校が移転し、平成１６年（2004）に同小学校が由利小学校に統合されるまで、５０年間使用され続けました。

■沿革詳細

旧鮎川小学校校舎は、当初旧鮎川村が旧鮎川中学校校舎として、昭和２８年、２９年の二カ年に亘って建設した、木造校舎です。

昭和２２年創立の鮎川中学校は、新校舎新設まで東鮎川山崎にあった鮎川小学校に併設されており、昭和２９年、校舎完成（当該建造物）とともに独立移転しました。その後鮎川中学校は、昭和３０年の町村合併により由利村立鮎川中学校となり、さらに由利村の町制施行に伴い、昭和３５年には由利町立鮎川中学校となりました。しかし、新設移転から１６年後の昭和４５年４月１日には由利中学校に統合し、校舎は中学校としての役割を終えたのです。

一方鮎川小学校は、明治７年に町村瑞光寺を仮校舎として開校しました。明治２０年には鮎川尋常小学校と称し、明治２６年、東鮎川字山崎に新築した校舎へ移ります。その後、明治４２年に高等科を併置して鮎川尋常高等小学校と改称しましたが、昭和１６年の学制改革により、鮎川国民学校となりました。そして昭和２２年には、教育基本法・学校教育法の公布に伴い鮎川小学校と称し、高等科を廃止して鮎川中学校を併設しました。さらにその後の昭和３０年には、町村合併により由利村立鮎川小学校に、昭和３５年には、町制施行により由利町立鮎川小学校と改称されました。

最終的には、昭和４５年４月１日、鮎川中学校の由利中学校への統合に伴い、空いた鮎川中学校校舎（当該建造物）には鮎川小学校が移転することとなり、以後平成１６年４月１日に由利小学校に統合されるまでの３４年間、鮎川小学校として利用されてきたのです。

なお、当該建造物は、昭和５０年１２月に音楽室と廊下の仕切りを除去して現在のように改修したほか、平成２・３年には校舎改修として板張りの床の研磨、体育館外壁塗装等を実施し、さらに校舎棟については平成８・９年にサッシ窓への取り替え工事を行っています。

鮎川小学校が閉校した平成１６年３月３１日以降は、校舎の保存活用に賛同する県外在住者や地域住民の協力を得て校舎を維持管理する一方、平成２０年７月には活動母体として「鮎の風実行委員会」が設立され、環境整備や交流会等を開催してきました。平成２２年４月には、同校を会場に、「第２回よみがえる廃校全国サミット」も開かれています。また、平成３０年には「鳥海山木のおもちゃ美術館」として、多世代交流・木育体験の学び舎として蘇り、人気の施設となっています。

由利本荘市教育委員会

○旧鮎川小学校の特徴

旧鮎川小学校校舎は、本来旧鮎川村が中学校校舎として、昭和２８年、２９年の二カ年(1953・1954)に亘って建設した木造校舎です。総事業費 29,959,494 円を費やして建設した校舎であり、その経費が、当時の鮎川村二ヶ年の総予算（計 40,186,000 円）の７４％にあたることからも、校舎建設に向けた村民の期待と情熱を感じ取ることができます（国庫補助なし）。

設計・工事に関わった人物は、体育館壁面に掲示されている棟札から、設計者・遠田長吉、建築請負・木内文吉、敷地均請負・畠山久治、棟梁・石川宇一郎であることが分かります。

校舎は、東西方向に平行に延びる教室棟三棟と屋内運動場の構成です。校長室のある中央校舎棟を中心として、両側に均等に校舎棟を配置した左右対称構造であり、妻部を特徴的にして高さを強調した屋内運動場を校地北側に配置し、四棟全ての切妻を校庭側に向けるなど、全体の均衡を意識して設計されています。

構造は木造平屋建・切妻造・桟瓦葺で、外壁は焼杉南京下見張り、一部モルタル目地切です。教室群の架構は洋組（キングポスト形式）で、梁間方向を１スパンに架構し、教室と廊下を１ユニットにしています。なお、屋内運動場も同様に洋小屋構造（キングポスト形式）です。

また、外観は、外壁に濃茶の木製ペンキを塗って落ち着いた雰囲気を出す一方、柱部や窓枠部、換気口を白ペンキで縁取りしてツートンカラーとし、モダンな雰囲気を醸し出しています。加えて屋内運動場の妻部については、灰色壁面に高く延びる白い柱列が、より屋内運動場の高さを強調する構造です。

内部の床は杉板張りで、腰壁はタテ板張り、天井は竿縁天井とするなど、徹底して和風造作をした校舎です。天井部を全面塗装したほか、平成８・９年には外側窓部をサッシ窓に更新しているものの、それ以外の杉板張りの床や腰壁、建具などは建築当時のまま現在まで維持されており、秋田杉の木目を活かした調和のとれた美しい校舎の姿を、そのままの状態で今に留めています。

昇降口は、四棟の間に均等に、かつ同規模に三カ所配置され、校舎棟との調和を保つとともに、中央昇降口のみ教職員の他来客を意識した、特徴ある玄関造りです。

校舎は、日照を意識した東西方向に延びる配置であり、各校舎棟においても、南側に教室、北側に廊下を配置するなど、典型的な配置形式を採用した校舎でもあります。また、木造、切妻造、桟瓦葺、外壁横板張りの校舎形式は、旧西滝沢村が、明治４１年に建築した初期の西滝沢小学校校舎や、大正４年に旧鮎川村が建築した初期の鮎川小学校校舎と同形式であることが､残された写真で確認できます。こうしたことから、これら校舎形式は、明治・大正時代から戦後まで引き継がれた校舎形式であることを知ることができます。

このように旧鮎川小学校校舎は、明治末期から大正期の校舎の建築形式を引き継いだ昭和２０年代の数少ない木造校舎であるとともに、建築当時の規模のまま、その大部分を今日まで維持してきた全国的にも稀少な校舎であり、その規模は、現存する木造校舎では秋田県最大級です。また旧鮎

川小学校校舎は、秋田杉の木目を活かした床や壁、天井や建具など、和風を強調しながらもモダンにデザインした、建築当時の特徴が良く残されている調和のとれた美しい校舎でもあります。現在は、校舎設計時に意識した「均衡のとれた校舎配置」「木材の特徴を活かした和風校舎」を強調した、東北日本海側の特徴ある木造校舎を活かし、多世代交流・木育体験の学び舎「鳥海山木のおもちゃ美術館」として蘇り、人気の施設となっています。